

## はじめに

略歴紹介。——ピエール・ルヴェルディ、一八八九年九月一三日ナルボンヌに生まれる。旅行なし、冒険なし、経歴なし、だが多くのもめ事あり！<sup>①</sup>

これはピエール・ルヴェルディが一九二四年に出版したアンソロジー詩集『空の漂流物』に付した作者略歴である。この当時、冒険譚や異国趣味などを下地とした作品を売り出す作家や詩人は、しばしば自らの旅行体験を語ることで作品に説得力を持たせていたが、そんな風潮を拒むかのようにルヴェルディはぶつきらぼうに振る舞う。この態度が、読者の興味を呼び起こすかどうかは別として、一九二四年当時のルヴェルディは自身について語ることを拒み、読者を突き放すところがあったようだ。

自分をセールスするつもりがない詩人ではあるが、「魂の不滅なる白い砂漠」と題されたこんな詩が埋もれているのは惜しいことだ。

今、愛と私の間には、もはや死がもたらした蒼白の傷痕とすぐに消えてしまふ沈黙の痕跡しかない。

愛と私の間には、もはや苦悶の差し出す握手がもたらす冷たい締め付けしかない。愛と私の間には、もはや敗北の隘路に私の道を跡付ける血の滴りしかない。この砂浜では砂の一粒一粒が生気なく感じ取れないほどの小さな記憶である。そこで、莫大な重力がかかるなか、口をつぐみ、形を思わせる細部をまったく持たずに、行ったり来たりするのだ、白い人物たちが、白い顔で、白い身体で、白い苦痛を生き、ほとんど白い後悔、白い思いを抱えて。そして私、この取るに足らない渦巻のただなかで少しづつ無色になる私。

(OC2, p. 536)

詩語の生み出す堰塞と溢出——ルヴェルデイのこの詩を訳出して強く感じられるのはそういったダイナミックな運動だ。冒頭、私たちが通常文章を読んで理解できるという意味での理解からは程遠く、読む行程にブレーキがかけられる。何かが生まれようとしているが、まだその期待にとどまった状態が二行、三行としばらく続く。だがこの閉塞的状态が突如解消されるようにして白い「砂漠」が開かれる。沈滞からこの眩しい開けへ、白さの横溢、そして浸透、同化。ここでは、初期詩篇にみられる断片的詩句の衝突や絡まり合いから生じる瞬間的な相対けでなく、ある程度長さを持つ散文詩でみられる継起的な相がある。

ときに相反し、ときに調和する運動、そしてそこから感じ取れる微かなあわい、こういった意識をもってルヴェルデイの詩作品に向かい合うと、「魂の不滅なる白い砂漠」と同じ雑誌に掲載された散文詩や同時代の作品群が私たちの身体に馴染みはじめてくる。

ところで、この詩の初出は一九二八年の雑誌『クロニック6——ロゾー・ドール』で、この雑誌掲載の作品群が収録されているのは『ガラスの水たまり』（一九二九）という詩集だ。この詩集を起点にすれば、近づき難い

ルヴェルデイの詩作品に対する接し方も体得しやすはず。けれども、この詩人には詩作品の外では腑に落ちないところがある、それは読者を煙に巻くようなところだ。

\*

この鍵になる詩集『ガラスの水たまり』は、一九二九年に七五六部が発売されて、一九六〇年にルヴェルデイが亡くなってから十二年後、一九七二年にフラマリオン版が出版されるまで、長らくの間、幻の詩集として多くの人の目に触れることがないままだった。というのも、一九四五年のアンソロジー詩集『ほとんどの時間』および詩人の後半生の作品集である一九四九年の詩集『手仕事』、そのどちらにも『ガラスの水たまり』が収録されていないからだ。したがって『ガラスの水たまり』の諸詩篇も感興極まるこの詩集の「書評依頼」も長らく伏されたままであった。なぜこの詩集がアンソロジーに加えられていないのか、ルヴェルデイは読解の鍵となるような詩集を隠したかったのか、それ以上にこの詩集を彼自身の人生から抹消したい思いがあったのか。いずれにせよこの詩集だけが作品集のどこにも組み込まれていなかった。

その後もなぜアンソロジー詩集に『ガラスの水たまり』を組み込まなかったか、ルヴェルデイはこの詩集の存在を忘れてしまったかのように何も語ることがなかった。だが、彼自身の体験については語りはじめようになる。詩人は一九三〇年代になってから徐々に自分のことを語りはじめ、一九五〇年代にジャン・ルスロとの書簡のやりとりの中で自分の幼少期のことや、詩に対する率直な思いを告白しはじめる。この書簡交換は、出版社ピエール・セゲールのセリ・ポエティックでルヴェルデイを扱う巻号が出版されるため、その準備としてなされたものだった。だがその出鼻を挫くように、ルヴェルデイはルスロにこう書き記していた。

あなた（ルスロ）は決して実在の人物（ルヴェルディ）に辿り着くことがないでしょうから、あなたは私の言うことに従ってその人物を作り上げなさい。<sup>(2)</sup>

やりとりされた手紙を介してあなたのルヴェルディ像を作り上げなさいとルスロに助言する。やはりこの詩人は相手のことを突き放してくる。間違ってもビエール・ルヴェルディその人だと思わないでくださいよと、釘をさしているように思う。確かに詩人は自分自身のことを打ち明けている、けれども自分のことを分かってもらいたいなどという気持ちは毛頭ないし、詩人本人が真実を語っているのかも判断し難い。せいぜい自分についての虚像でも作り上げてくださいな、という程度でしかない。ルスロがあるひとつのルヴェルディ像を作り上げたように、本書においてもまた詩人ルヴェルディの虚像を作り上げるだけで、それ以上でも以下でもない。

だがこの詩人の言葉は同時に、『私の航海日誌』（一九四八）の切実な一断章の「ほんとうのこと」を思い起させました。

人はある偉大な詩人についていくつも本を書く、彼自身はあまり多くの本を残さなかった詩人についてだ。その詩人が作品を書いていたその時、彼の生はその作品よりも謎めいたものであった。この感情的で、知的で、精神的な生を人は真に迫って再構築することを望むが、詩人が明らかにしようと思んだほんとうのこと<sup>(3)</sup>について、確かなことなどほとんど何も知りもしない。その人はそんなことを考えもしない。というのも表現不可能で説明不可能な詩人の深い冒険、内奥の思考、真の喜び、真の悲しみは、深海の底の砂粒のように永遠に失われたからである。

(OC2, p. 699)

ルヴェルディ自身が真に体験したと思うこと、苦しみ、痛み、挫折、諦めそしてほんの少し喜びは、決して他

人には分らない。この海に沈んだ「砂粒」は、先に引用した「魂の不滅なる白い砂漠」で身体から物質化してこぼれ落ち、もう見出すことのできなくなつた「記憶」のように、誰にも見出されることはないのだ。それどころか詩人自身でさえ、自分の貴重な内的体験を「ほんとうのこと」として書き記したり、理解したりすることもできない。それゆえに「彼自身はあまり多くの本を残さなかつた詩人」と言うのではないか。そう、詩人にとつても、「ほんとうのこと」は「表現不可能で説明不可能」、「深海の底の砂粒のように永遠に失われた」。自分でも自分のことを見出すのは難しい、ルヴェルディは自分すらも突き放して見ている。「ほんとうのこと」に達しえない、このことは詩人が何か大切なものを追求しようとするときに、いつも突き当たることであり、それでも詩作行為を続けてきた彼の絶望的な実感そのものである。

ルヴェルディが自分の「生」について隠匿したり拒絶したりしてきたのは、「ほんとうのこと」に達し得ない、書いたとしてもそれは「ほんとうのこと」には程遠く、結局は虚像にとどまつてしまうとの思いがあつたからに違いない。それなら黙るしかないのではないか。詩人自身がそのように行き詰まっているのに、ある詩人について明らかにしようとする人がそこで何を語つたとしても、結局は虚像の虚像であり、いくつもあるうちのひとつの影にすぎない。もしかしたらとんでもない屑を生み出してしまふだけかもしれない。その人は、その詩人が「望んだほんとうのこと」など何も知りはないし、そのような意識すら持たず、考え及びもしない。そのことは強迫観念のように私に取り憑いてきた。詩人に触れたかもしれないなどと思うこと自体が思ひ上がりすぎず、詩を読んだ時の自足的満足感に留めるべきで、読む者の心にしまつておくべきだと。それなのになぜわざわざ語ろうとするのか、そう考えるとルヴェルディについて語ることの何もかもが、彼について何も知らないことを明らかにしているようで、せいぜい虚像を増殖させるだけだという想念に陥つてしまふ。絶対に「ほんとうのこと」には触れ得ない、それを意識したときに、ルヴェルディに向かい合うことも避けなくなつた。

\*

ではなぜ詩人は終生にわたって書き続けたのか。年齢を重ねて丸みを帯びてきた詩人が語るのはこうだ。

この常軌を逸した過剰なほんとうのことへの愛に詩人は蝕まれてゆく。ほんとうのことは彼の探求から逃れ去り彼を消耗させてしまう。それでも彼は作品を糧として提供しつつそれを通してその愛〔ほんとうのことに対する愛〕を人間存在のうちに再発見したのである。<sup>(4)</sup>  
(OC2, p. 1291)

ここで引いたのはラジオで詩人自身が語ったことをもとに起こされた詩論「詩と呼ばれるこの情動」だ。喋るということよって呼び起こされたのか、意外な詩人の内情が吐露されているように思える。辿り着くことのできない「ほんとうのこと」、不可能なことに対する執着、それに対する異常なまでの愛、それは詩人をすり減らし、悩ませ、苦しませ、最終的にいつも挫折を刻み込む。やはり詩人は「ほんとうのこと」に辿り着けない苦しみに疲弊していた。

ここで書くことをやめるといふ選択肢も十分にあっただろう。十九世紀にはランポーが、二十世紀にかけてはヴァレリーが、より広い文脈では近代から現代に至るまでの文学全体が、口籠ること、沈黙することといった書くことからの撤退に嵌まり込んだが、逆説的にもそこに可能性を見出そうともしてきた。句読点や紙面上の空白を読ませようとする試みだけではなく、書かないことそれ自体が価値を高め、ルヴェルデイもそのようになる可能性が十分にあった。少なくとも、沈黙の中に潜在する言葉を浮き立たせようと、紙面上の空白が大きく広がる詩を書き続けるということもありえたはずだ。けれどもルヴェルデイは逆行し、空白を埋め、散文化した詩を

長々と書き、強い決意をもって書くという選択をした。いや選択すらなかったのだろう、彼には書き続けるという一択しかなかった。それは一九五一年五月十六日、ジャン・ルスロに宛てた手紙の中で明かされる。

私は書いたのです、ただ一つの冒険を、続きゆく冒険を、つまり生を、むろん固く閉ざされた、説明不可能な、最も単純ですらある生を、囚われていたとしても熱烈なこの生を、常に覗き穴に釘付けとなった貪欲な二つの眼<sup>5</sup>で。

ルヴェルデイの生と書く行為は不可分の関係にあり、この行為無くして彼は生きることでもできなかった。書く行為を肯定し、生涯にわたって書き続けた。そうして詩人は自分の生と和解し、自分の生きる場を築いていった。書く書かないで悩むことのなかったこの詩人は、書く行為を通じて価値を高めた詩人であり、むしろそのことは現代文学の流れの中ではアナクロニスムな彼の独自性である。

そして、このように生きること＝書くことを基調とするルヴェルデイのもとには、いかなる困難、挫折、諦めがあったとしても「ほんとうのこと」への愛に貫かれた詩作品が残される。かりにそこに辿り着けなかった、詩人からすれば失敗であったとしても、その詩作品には「ほんとうのこと」に対峙した詩人の苦闘の痕跡が刻み込まれており、その詩作品を通じて私たちは詩人が貫いた愛を感じることができる。私たちはその愛に浸透されて、世界をそして人間存在を見ることができるようにもなるだろう。詩作品は、「ほんとうのこと」に触れているのではない、確かにそうかもしれないが、それでも思いもよらぬあり方で新たな価値を生み出す。そうしてついに、晩年の雑感を綴った手記『ばらばらで』（一九五六）で、次のような一文が書かれることになるだろう。

私たちは、しばしばどんなにひどいものであっても、私たちの実践した方法によって得られたすべてのほん

とうのこのイマージュをより好むのである。

(OC2, p. 879)

卑下するような言い方をしているが、「ほんとうのこと」に向かい合い生み出されたものについて肯定的に受け止めている、そうした詩人の言葉があるように思う。詩人の手から生まれ出たものを認めること。まだ若かった頃ルヴェルデイは「再現前でなく現前することが芸術作品の本分である。生まれた子は何かを再現しているのではなく、「自分自身の生を持つ」現前なのだから」(OC1, p. 54)と言い放っているが、その言葉は今でも息づいているように思える。芸術作品がそれ独自の生を持つならば、そのありのままを受け入れればよい。だから私たちは、「ほんとうのこと」の虚像とでも何と呼ばれたとしても、ただ生まれ出たものに触れ、感じればよいのである。詩作品を介して、詩人に、自然に、他者に対して愛を感じることができるようになればよいのである。そのとき逆に「ほんとうのこと」を捉え損ねた詩作品こそが、世界、人間、愛について多くのことを与えてくれるはずだ。

ルヴェルデイと向かい合うことを避けなくなったり、彼について語ることに困難さを感じたりするのは、「ほんとうのこと」に対する詩人の体験と近い体験なのかもしれない。常に両義的な気持ちがあり揺れ動いている。決して詩人に近づいているのではない、けれども詩人を介して書くことで何かが生まれるかもしれない。そこに投企するしか私にも選択肢がなかった。ルヴェルデイとともに私も書く行為を続け、書く行為に信をおきたいと思う。

\*

本書は、ルヴェルデイの詩作品を精読しながら詩人像を浮かび上がらせようとする個人研究の書となる。ルヴ

エルデイの詩作品が、日本人である私にどのように解説し得るのか、〈あわい〉という和語によって彼の詩業がどのように言い表せるのか、そのような試みに捧げられている。およそ五十年にわたるルヴェルデイの詩的営為の軌跡は、ある詩的成熟に向かう一本道ではなく、多くの挫折、やり直し、嫌気、諦め、ほんの少しの喜びをめぐって紆余曲折した道のりを描いているが、それこそがルヴェルデイの詩学を豊かにしている。彼の詩作品が内包する奥深さを掘り下げ、ある時代から次の時代へ書き繋がる内的連関のダイナミズムを提示できるように注力した。その道程を一連の経験として私たちのものにするためにも、時代順にルヴェルデイの詩作品を読み解いたのである。こうした読解の過程において、心的なイマージュが与えてくれる感触、言葉に動かされる感覚、日常の風景あるいは不吉な世界が突然変貌を起こして全く異なる世界が現れてくるダイナミックな転回、解釈を拒まれ宙づりにされる居心地のなさ、初読とはがらりと変わる再読したときの詩世界の多面性、そして夜眠る時に思い出す心地の良い感覚、そういったものを提示しながら、最終的にルヴェルデイの詩作活動の中で一貫して観察できる特徴、私たちが〈あわい〉の詩学と呼ぶものを提示できればと考えている。